

「七これ——かしこ（都寛） 八帰路——帰洛を（群扶）路（神） 帰路を（天岐黒内松御筑九加都寛） 二よりて——より（加） 二をは——を（黒） 三みやりたる——見やたたる（都） 三ことさら——ことさらに（群神天岐東黒内松御尊筑九加都寛） 三侍り——侍るか（黒） 侍るなり（筑都寛） 侍候（加） 三は——×（加） 三も——そ（群扶神天岐東黒内松御尊筑九加都寛） 三降し——降（黒） 三の——のイ（東×御） 二に——×（神） 三や——に（加都寛） 三時分——時分に（天岐内松） 時（加） 三に——へ（黒） 三よくせずは……けり——×（神東黒） 三よく——よう（内尊筑九） 三けり——ける此終ノ一行異本（天岐） ける（内松） キイニけり（都）

## 44 南都百首ハ文明五年六月以降▽

底本内閣文庫蔵「詠百首和歌」本ハ201・453▽

校合本河野信一記念文化館蔵「詠百首和歌」本ハ123・922▽

島原公民館松平文庫蔵「歌書集奥」ハ119・6▽所収「後成恩寺百

首和歌」本（松）

内閣文庫蔵「墨海山筆」ハ217・31▽第九四冊所収「一条禅閣百

首和歌」本（墨）

天理図書館吉田文庫蔵「詠百首和歌」本ハ81・吉119▽

金刀羅宮図書館蔵「詠百首和歌」本ハ23・5・1277▽

内閣文庫蔵「後成恩寺殿南都百首」本ハ201・461▽

群書類従本（群）

宮城県立図書館伊達文庫蔵本ハ911・24・17▽

大阪市立大学附属図書館森文庫蔵本ハ911・FUJ・森文庫▽

（大）

（伊）

（群）

（内）

（金）

（天）

（墨）

（松）

（河）

玉<sup>一</sup>しきた<sup>⑤</sup>いらの都<sup>二</sup>をさそ<sup>二</sup>らへ出<sup>二</sup>てあ<sup>二</sup>をによ<sup>二</sup>しならの京<sup>二</sup>にす<sup>⑥</sup>ま<sup>⑥</sup>るせしより  
 このか<sup>二</sup>た六<sup>二</sup>とせの春秋<sup>二</sup>をを<sup>⑥</sup>くりむ<sup>二</sup>かへては昨日<sup>二</sup>の夢<sup>二</sup>のまたさめぬかとう  
 たか<sup>二</sup>ひひとつ空<sup>二</sup>の月日<sup>二</sup>をあ<sup>二</sup>ふき見<sup>二</sup>てはむかし<sup>二</sup>の友<sup>二</sup>にむかへる思<sup>二</sup>ひをなせ  
 りみ<sup>二</sup>かさの山<sup>二</sup>のふもとのち<sup>二</sup>りにま<sup>二</sup>しはりてあめ<sup>二</sup>かしたの白浪<sup>二</sup>しつかなら  
 ん事<sup>⑥</sup>をいのり春日<sup>二</sup>のゝとふ<sup>二</sup>ひのか<sup>二</sup>けをのそ<sup>二</sup>みても雪<sup>二</sup>まのわ<sup>二</sup>かなつむにさ  
 またけ<sup>二</sup>なしとい<sup>へ</sup>へとも七<sup>二</sup>そちあ<sup>二</sup>まりの波<sup>二</sup>のしはのふ<sup>二</sup>るはかりの思<sup>二</sup>出<sup>二</sup>もな  
 く千<sup>二</sup>とせをふ<sup>二</sup>へき松<sup>二</sup>ならぬ身<sup>二</sup>はな<sup>二</sup>けきのもとを<sup>二</sup>はな<sup>二</sup>れかたしものゝふの  
 家<sup>二</sup>にしむ<sup>二</sup>まれされはゆ<sup>二</sup>みむまの<sup>二</sup>みち<sup>二</sup>にた<sup>二</sup>つさはる<sup>⑥</sup>へきにもあ<sup>二</sup>らすのりの  
 しの門<sup>二</sup>を<sup>二</sup>は心<sup>二</sup>さすとい<sup>二</sup>へともは<sup>二</sup>な香<sup>二</sup>のつと<sup>二</sup>めに物<sup>二</sup>うくしていた<sup>二</sup>つらにあ  
 かしくらし<sup>二</sup>なをさ<sup>⑥</sup>りにお<sup>二</sup>きふす<sup>二</sup>ひま<sup>二</sup>くには<sup>二</sup>から<sup>二</sup>のうた<sup>二</sup>や<sup>二</sup>ま<sup>二</sup>とこと葉<sup>二</sup>を  
 もてあ<sup>二</sup>そひてそ花<sup>二</sup>のあ<sup>二</sup>した月<sup>二</sup>のゆ<sup>二</sup>ふへ<sup>二</sup>をは<sup>二</sup>なくさ<sup>二</sup>みにけるこれによりて  
 堀<sup>二</sup>川の院<sup>二</sup>の百<sup>二</sup>首<sup>二</sup>の題<sup>二</sup>をえ<sup>二</sup>らひて大<sup>二</sup>和<sup>二</sup>国<sup>二</sup>の諸<sup>二</sup>所<sup>二</sup>の名<sup>二</sup>によ<sup>二</sup>せつゝ硯<sup>二</sup>の水<sup>二</sup>のあ  
 さき心<sup>二</sup>さしにま<sup>二</sup>かせて筆<sup>二</sup>の林<sup>二</sup>にく<sup>二</sup>ちぬることの葉<sup>二</sup>をか<sup>二</sup>きあ<sup>二</sup>つむるといふ  
 事<sup>二</sup>しかなり

○ 詠百首和歌 — × (内群伊大刈)

○ 桑門覚恵 — × (内群伊) 藤原兼良 (伊刈)

○ 帰る — かはる (群伊大刈)

○ すと — する (墨内群伊大刈) ○ まゆみ — 梓 (松) あつさ (墨)

〔校異〕 二玉しき — たましきの (墨内群伊大刈) 二さそらへ — × (墨) さすらへ (内

群伊大刈) 三は — × (群伊大刈) 四みかさの山 — 三かさ山 (墨金群伊大刈) 五

ましはりて — ましはり (群伊大刈) 六白浪 — × (内群伊大刈) 七つむ — つまん

(内群伊大刈) へいへとも — いふへとも (大) 九思出 — おもひ (墨) 一〇へき —

× (墨) 二心さす — ころさせ (内群伊大刈) 三といへとも — とも (内群伊大

刈) 四はな香 — はなの香 (墨) 五はな香・・物うくして — × (内群伊大刈)

一やまと — やまとの (墨内群伊大刈) 二こと葉 — 言の葉 (大) 七をは — を (内

群伊大刈) 八諸所 — 名所 (群大) 九筆 — くさ (内群伊大刈) 一〇ことの葉 — こ

とは (内群刈) 三かきあつむる — かきつむる (刈)

# 詠百首和歌

桑門覚恵

## 春二十首

### 立春

302 飛鳥河なかれてはやき年波も けふを春とや立帰るらん (む)

### 子日

303 子日すつまゆみの岡の姫小松 引やまとるのはしめなるらん (む)

### 霞

304 杉たてる門をや春も尋けん (む) 三輪の山辺のけさはかすめる

### 鶯

○光に―光も(墨) ○朝―泪(河天)

○コノ歌ナシ(内群伊大刈)

○もる―もり(群大) ○あと―×(墨)

○みし世―みし夜(墨) みしま(伊刈)

○よとに―よとの(内) ○つる―へる(天)

○青根か嶺―青根に嶺(松)

305 春といへは出る光にさそはれて 朝の原にきなく驚

若菜

306 いまいくか日数をつてみ飛火のゝ 野へのわかなはもえんとすらん(む)

残雪

307 とのへもるたかあとつけて出つらん(む) 御垣か原の雪の村消

梅

308 泊瀬河はやくみし世の古郷に むかしわすれぬ梅かゝそする

柳

309 玉柳六田のよとに糸はへて わかあゆつるとみゆる春哉

早蕨

310 うちけふるわか草山の下わらひ 木のめも春と今やもゆらん(む)

桜

311 昨日けふ嶺にも尾にも白雲の たつたの桜いまさかりかも

春雨

312 苔筵しくくふれる春雨は 青根か嶺そ色まさりける

春駒

313 小さく原なつみし駒も引かへつ ひのくま河の春のけしきに

○なげやなけーなげやなは(金)  
○春とー春に(群大) ○けりーけ  
る(墨)

○行来ー行け(河天)雪け(内群伊  
大刈) ○岡にーはかに(墨)岡の  
(天)

○藤ー藤花(内群伊大刈)  
○けりーける(墨) ○閑院ーよせ  
侍ー(題ノ下ニ割注トシテアリ(松  
金) 319) 題ノ下ニ割注トシテアリ  
(墨) × (内群伊大刈) ○閑院ー閑  
院の(河松天) ○南門堂をー南門  
堂(金) ○よせ侍ーよせて(墨)  
○くれてーくれば(松)

○のみとーとのみ(内群伊大刈)  
○花もー花は(群大) ○ちりけれ  
ーさりけれ(河天)

帰鴈

314 霞しくゆきけの沢をたつかりの またふるさとはさえ帰らん(む)

喚子鳥

315 なげやなけさほの山辺の喚子鳥 はゝそも春とひこはえにけり

苗代

316 五十串たてひくや御しめのなはしろに 布留のわさ田も春や知らん(む)

董

317 一夜ねし露たに袖はしほれしを 行来の岡につむ董哉

杜若

318 猿沢の池の玉藻やへたつらん(む) 底にはさかぬかきつはた哉

藤

319 藤なみのかゝるすゑはもめくみけり 南の岸にたてしちかひは  
閑院左大臣南門堂をたてゝ藤氏のさかへをいのりし事を思よせ侍(そ)

款冬

320 ぬししらぬ花染衣はるくれて 口なし山にさける款冬

三月尽

321 けふのみと春にたむけの山桜 むへこそ花もぬさとちりけれ

## 夏十五首

更衣

夏歌  
夏一つな群大　〇きてーきく  
(墨)

卯花

御室ーか室(河天)

323 さきにけり神の御室の榊葉に　しらゆふかくる岸の卯花

葵

〇よるくー夜なく(大)　〇かなしーかけし(河松墨天内群伊大刈)

324 神山のあふひはよその契にて　よるくーかなしかつらきのはし

郭公

〇きゝつともーきつとも(大)きゝつとも(内伊刈)

325 きゝつともいはせの杜の郭公　人つてならぬ一声も哉

菖蒲

321 としをへて五月のけふはをたえせぬ　玉井の沼にあやめひくなり

早苗

すか原やふしみのさなへほのくーと　あくる田面にそよくをそまつ

照射

〇あけぬーあくる(内群伊大刈)  
〇をーおの(群大)　〇くらはし山のーくらはし山に(群大)

328 あけぬとやともしするをもわかるらん(む)　くらはし山の横雲の空

五月雨

〇しるくーしなく(墨)

329 さみたれは水分山の名もしるく　雲におちそふ滝の白浪

〇廬橋—橋(内群伊大刈)

廬橋

330 いにしへをみきのつかさの袖の香や ならのみやこにのこる橋

螢

〇かはと—かはも<sup>と</sup>

331 山かけはまた夜やのこる夏箕川 かはとあけてもとふ螢哉

蚊遣火

〇夜はの—よるは(河内伊)夜は(天刈)よるの(群大)

332 払えぬうちわの里の蚊はしらに 煙たてそふ夜はのあくた火

蓮

〇いる—池(河松墨大金内群伊大刈)

333 たをやめの花のすかたのいる水に 船をうかへてとる蓮哉

氷室

〇もらて—もえて(天) 〇もる—もる(山(金))

334 春日山日影はもらてひむろもる しけみか下そ夏の外なる

泉

△注V 334 335 (内群伊大刈)

335 秋はけふまた夏なからたつの市や うるまの清水むすふ袂に

六月祓

〇御祓—みちき(刈)

336 夏はつる御祓やうけし神南備の 森の秋風ゆふかけてふく

秋二十首

立秋

〇一葉の—一葉も(内群伊大刈)  
〇天か下—天下(墨)天の下(群伊大刈)

337 三かさ山もりの一葉のおちそめて 天か下には秋風そふく

○名をや―名のや(大)

○龍門―いへり(題ノ下ニ割注  
トシテアリ)(松金)×(墨内群伊大  
刈)

○露に―露そ(大) ○みたる―み  
たけ(刈)

○うこかす―そこかす(墨)

## 七夕

338 たなはたの手向にさらすけふはかり なに山姫の名をやからまし

龍門の布さらす山ひめの事をいへり

## 萩

339 花すりのたもとほ露にみたるとも 猶わけゆかんまのゝ萩原<sup>(む)</sup>

## 女郎花

340 ゑにかけるかたちのをのゝをみなへし 心うこかす秋風そふく

## 薄

341 かりねするたまぐらののゝしの薄 くるれは露やまつ結らん<sup>(む)</sup>

## 荳蔻

342 風かよふあきつのをのゝかるかやの みたれて物は我そかなしき

## 蘭

343 ふちはかま春のゆかりの花の名に おふ川のへを秋そにほはす

## 萩

344 秋風をならしのをかにならしても そよとおとろく萩の音哉

## 早鷹

345 とふかりの羽買の山の山風も はらふか峯のをちの白雲

○秋風を―女郎女(金)

○早鷹―初鷹(松墨)

○花の名に―花すゝきなに(伊刈)  
○おふ川―おほかは(松墨金)おは  
つ(大)

○山風も―

○山風に(松)

〇こふーとふ(松群大)

鹿

346 さはし(を)かのつまこふ声もたかまとの 尾上のま萩いまさかりかも

露

347 物思ふ袖にもさそなしけをかの 草葉にあまる秋の夕露

霧

348 宮の滝きりのとはりのひまみえて 落る白玉はもる人もなし

槿

349 あさかはの花かも霧の晴間より みそめのさきの面影そたつ

駒迎

〇かもーにも(金内群伊大刈) 〇晴間ーたえま(松) 〇みそめーみそき(伊刈)

350 春日野のおとろのみちはわけすとも 鹿毛なる駒もけふやひくらん(む)

月

〇露の光ー露光(内)

351 あひにあひて露の光も玉きはる 内の大野の月そさやけき

擣衣

〇月ー。(天)

352 里人のうつや衣もたゆむらん(む) 十市の山に月かたふきぬ

虫

353 夜寒そふ秋ははつせの山風に 猶もつれなき松虫のこゑ

菊

○そかひーうかひ(刈)

354 みゝなしのいけのそかひに咲にけり なにをか音にきくの白露

紅葉

○おるーなる(内群伊大刈)

355 時雨ふる三輪の檜原をかきわけて 秋や紅葉のかさし(おる)る(ん)

九月尽

○又一老(群伊大刈)

356 はつせ女かしつはたおひの長月も くるれはけふに又めぐりつゝ

冬十五首

初冬

357 かしは木のもりは朽はにうつもれて 道こそなけれ冬はきにけり

時雨

358 まてしはしさのゝわたりの夕時雨 やとゝふみわの里になるまで

霜

○わたすーまよふ(大)

359 白妙の雲間の虹は中たえて 霜(お)をきわたすくめの岩はし

霰

○さゝー篠(金内群伊大刈)

360 神なひのあささゝ原にふるあられ ひろはぬ玉や世に残る(お)らん

雪

361 たまくしけみむろの山のおくる夜に 鏡をかけてふれる白雪

寒蘆

〇のゝのに(群伊大刈)

362 冬の夜はたく火にせん<sup>(む)</sup>としめしのゝ 沢辺のあしも霜かれにけり

千鳥

〇内浦(群大)

363 月影のきよき川原にさ夜ふけて 千鳥友よふさはの内かな

水

〇風川(大) 七瀬のよと七瀬  
よと(内) 〇なんけむ(金大)

364 昨日けふ猶さえまさるあすか風 七瀬のよとやこほり果<sup>(む)</sup>なん

水鳥

〇うらみーかきり(墨)

365 清澄の池の鏡のうらみあれや つかはぬ鳥の浪のうきねは

網代

366 瀬をはやみよしのゝ川の網代木に しらゆふ花のさかぬまそなき

神楽

〇うたふーこたふ(内)

367 庭火たきうたふあなしの山かつら あかつきかけてかみあそひせむ

鷹狩

〇うたのーかたの(群大)

368 うたの野々御ゆき跡ある君か代に あふやうれしきやかたをの鷹

炭竈

〇たかまー高矢(松)たま(天)

369 雲よりもたかまの山にたつ煙 よそにもしるし峯のすみかま

爐

〇うつみ火ー焔火<sup>埋イ</sup>(伊)

370 きえぬるか春より冬になら山の 黒木の小屋の夜はのうつみ火

○ならず―なかす（松天金群伊大刈）  
 ○いかたしも―いかたしの（内群伊大刈）  
 ○らめ―らん（内群伊大刈）

○恋はや―こひはや（内群伊大刈）

○ある―入（河天）

# 歳暮

371 まきならず丹生の川瀬のいかたしも さこそは年のくれいそくらめ

## 恋十首

### 初恋

372 けふよりは袖ふる山のみつかきも しらぬためしに人を恋はや

### 忍恋

373 もらすなよゆふる雲の下ひ山 谷にしつめる鳥の一声

### 不逢恋

374 日にそへて思ひますたのいける世の ためにねぬなはさそなくなるしき

### 初遇恋

375 なかれてのうき名おもへはみなれ川 見なれそめしそいまはくやしき

### 後朝恋

376 こりすまに又はまつちの山なりと かこちやせまししのゝめの月

### 逢不逢恋

377 二もとのすきにしかたそしのはるゝ ふる川のへにまとふ心は

### 旅恋

378 旅ねする枕の太刀のつは市に かへてうき身のあふ夜しらせよ

○こりすま―こりつ<sup>す</sup>ま（松） ○か  
 こち―にこり（天内群伊大刈）

○まとふ―おもふ（内群伊大刈）

○夜―に（内伊刈）

○ かるーかけ(伊刈)

○ 行ー片(松墨天金群伊大刈)

○ 恨ー恨恋(群)

○ とはーそはー(松)

○ をーに(松墨内群伊大刈) ○ あへぬーあへね(内)

思

379 かるもかく猪かひの岡の草なれや おきふす床の露のみたれは

行恋

380 うしつらし二上山の峯の雲 こなたはかりになとしくるらん(む)

恨

381 とはーこそいはせの山の秋風に 下はふ葛の露こほるとも

雑二十首

暁

382 月やとるとよらの寺のゑのはるを 結もあへぬあかつきの袖

松

383 名におひてたか木の山の松なれや 空のみとりに枝をかはせる

竹

384 うつり行鶯山の春風は ふしみの竹や先なひくらん(む)

苔

385 みよしのゝおくの岩やにすむとても 苔のしづくに袖はぬれなん(む)

鶴

○ 岩やー岩ね群伊大刈) ○ はーや(墨)  
○ コノ歌ナシ(金) ○ とせーとし(内伊刈)年(大) ○ もー。(河)  
○ あるーぬる(刈)

386 いくとせをふるのゝ沢に馴ぬらん(む) 今もおりあるつるの毛衣

○とのみーはれみ(大)  
とのみ

○草一原(伊刈) ○はしーのち  
(河松墨天金内伊大刈)

○関一まを(松) ○もるー守(大刈)

○にーの(「の」上ニ「に」ト重ネ  
 テ書キ、右傍ニモ「に」トアル)(金)  
 ○うちはしわたしー橋うちわたし  
(群伊大刈)  
 ○やすらふーやすらん(墨)

○やとからんーやとるらん(松)  
 ○きにけるー聞ける(河天内群伊大刈)  
 ○程にはー程は(松)

○とをーとは(墨) ○なれーしれ  
(大)

## 山

387 雲とのみみふねの山の花ならば つねにあらなん春はすくとも

## 川

388 昔見しきさの小川はかはらねと 我年なみそたちかさねぬる

## 野

389 かつらきやたかまの草にあらずとも しめさす野へはほしもきて見ん

## 関

390 よしの山花の関もる桜戸は 人をそとむる春はとまらず

## 橋

391 さほ川にうちはしわたし我家の 昔の跡を見るそうれしき

## 海路

392 龍田山嵐をさむみ大伴の みつのとまりに舟そやすらふ

## 旅

393 大和路のすみたかはらにやとからん とをくきにける程にはあらねと

## 別

394 よしさらは形見とをなれあかすして わかるゝ袖の岡こえの道

## 山家

○嵐ふきー嵐ふく(墨) 嶺ふかき  
(内群伊大刈)

○はーも(金内群伊大刈)

○ちりくーちかく(伊) 〇里  
ー都(金)

○しめんーからん(内群伊大刈)

○あたしのーあらしの(伊刈)

○栗まかんーくるまかも(内群伊  
大刈) 〇ますーまに(刈)

○やーを(松)

295 卷向の檜原くもりて嵐ふき 月にはうとき山の下庵

田家

396 吹風にひかぬなる子を引手山 ふもとのひつちもる人はなし

懐旧

397 かきつめしやまとことの葉ちりくーに ならの里人名のみふりつゝ

夢

398 あかつきのかねのみたけにやとしめん(む) こむ世をかけて夢やさめぬと

無常

399 あたしのゝ朝の露のきえぬ間に なにをむさほる心なるらん(む)

述懐

400 栗まかん事をしそ思ふ神のます 春日の原に家居せしより

祝

401 君かためとよをか姫のあとたれし 玉きの宮に千代やかそへん(む)

45 文明七年(一四七五)十二月二十九日日野政光三十

三回忌品経歌

【蔵本】宮内庁書陵部蔵『品経和歌』

## 詠勸発品和歌

沙弥覚恵

402 白妙のきさの木にさく花みれば 東ふく風に春そきにける

々々（懐旧）

403 みそちあまり三とせときくにおとろきぬ みしその夢は昨日と思ふに

46 文明九年（一四七七）七月七日七夕歌合卷末長歌

底本 群書類従所収本

404 あはれいかに ふ月七日の 雲のうへ ほしまつるてふ ともし火の

光さやかに あるへきに かかくる人も なきままに むかしを忍ふ

もしすりの 乱れたちにし よのなみは はやいくとせに 成ぬらむ

かかりしほとに いとたけの 手向にかふる 夜半なれと 秋のしら

へも 中々に 折にもあはぬ 円居とて ととめたまひし おほきみ

△注▽底本「おほきみの」に作る、  
意改。

の そのみころの かしこさを あふかぬ人こそ なかりけれ さ

りとてとしとし ひとたひの 行あひのよを いたつらに ねてあか

さむも さすかにて 甘の人を えらひつつ けふの日数の やまと

うた ほのほのよめの 勅なれば 仰をかしこみ 人々は 和歌の浦  
 半の もしほ草 かきあつめてそ たてまつる 其か中にも わたの  
 はら 星合のかけを うつせとも なかむるあまも なきさなる ふ  
 ねのかちのは とるとたに しらぬ事こそ うらみなれ けにこころ  
 ある しわさにて 野への千種を けふのため 手折もてきて かめ  
 にさし うしひく名ある はなをさへ 女郎花にそ あはせける か  
 くても中の はるるよは 星か川辺の ほたるかと 見えし光も み  
 かくれて 月はかりこそ そらにすめ かくはありとも ものおもふ  
 袖のなみたは かきくもり 我身にしらぬ 名とり川 無名とりても  
 こりすまの 恨もたえず 恋しさに 頼まぬものと いひなから ま  
 たてもあらぬ 夕くれは せむかたなみに よし野川 よしやよの中  
 今はとて いもせの山に のかれても 滝のひひきに あらそへる  
 木の葉の時雨 松のあめ 袖をぬらさぬ 夜半もなし 薪こるてふ  
 身なからも 玉のみきりを わすれぬは 君ちよませの ことの葉を  
 松にかけてそ 祈りける かかる情の おほかれは みかける玉の  
 こゑこゑに <sup>(お)</sup>をれるにしきの いろいろに 聞みる人をおとろかす  
 これを七十に つかひつつ 左右にと あらそへは 文のみにちも

もののふの たけき心は 有ぬへし 是そ時代に あふ坂の 山ちに  
 はへる<sup>(え)</sup> さねかつら 永きよまてや つたはらむ さてしもひろき  
 国のうち 我敷嶋の 道しれる 人のなくやは 有へきに みかさの  
 山の やまかけの 柴の庵に すみそめて ころもの玉を かけまく  
 も かしこき君か 島のあと 此ひとまきに 卷そへて 難波のうら  
 の よしあしを ころろに分て はりまなる しかまの市に かちま  
 けを しるしつけよの 御ことのり いかにせむとも またしらす  
 つらつらつはき つらつらに 思ひほとけは いなみのの いなみ申  
 さん<sup>(む)</sup> 道なくて 人のみるめは はつかしの 森のくちはを ひろひ  
 あつめ さほの川行 水くきの 跡にまかせて かくとしらなん<sup>(む)</sup>

47 文明十年（一四七八）二月三日北野社法樂百首続歌

【底本】宮内庁書陵部蔵『類聚和歌』

手向山

覚恵

405 折えては神に手向の山さくら つゝりの袖も錦なりける

常盤山

覚恵

406 真木のはのかわらぬ色もかわりけり ときはの松の秋のけしきは

小塩山

覚恵

407 時雨たにえやは染けるをしほ山 みゆき待間の千代の緑は

志香須香渡

覚恵

408 しかすかのわたりときけは袖ぬれぬ 君か舟出を待となけれと

角田川

覚恵

409 思ふこと有明の月の都とり 角田河原に音をのみそなく

飴磨市

△注△409と続けて書写されてゐる。

410 世をわたるわたにさこそはあき人の しかまの市に出ぬ日もなし

48 文明十一年（一四七九）正月七日三合厄祈禳和歌

〔底本〕『兼頭卿記』（大日本史料所収）

〔校合本〕『実隆公記』

『甲子夜話』正篇卷六二・二四

（寒）（甲）

王春木徳之□候人日菜羹之佳辰一段嘉言万般珍重抑今日立春也初子也  
 尤難得遭逢頗可謂邂逅仍為転三合之災厄聊呈進一首之祝語汗顔不少笑  
 口定多枉賜天覽候様可令洩披露給

〇三—み寒 〇たる—なる (寒  
甲) 〇七—七日 (寒甲)

頭左中将殿

411 これやこの三に合たるとしならん 七のはつ子春のたつ空 覚患上

御贈答御製

おりにあふことはの玉のひかりには なにかは三のほしもをよはむ

後聞随心院僧正被進一首於禪閣云々件一首如此

玉はゝき又なゝ草にと□□□□ 春たつ日にもあひにあひをひ

禪閣贈答

412 春日野を雪間になして春はきぬ わ□□□つまむ松や引へき

校異 □—初 (寒甲) 二般—端 (寒甲) 三候様—候之様 (寒甲) 四×—正月七日 (寒) 正月七日 覚患上 (甲) 五左—× (寒甲) 六×—表書同前 別紙一枚書様如此被卷加之 (寒) 別紙 (甲) 七御贈答御製—以下ナシ (寒) 御製御返し (甲) へおりに・・・—以下ナシ (甲)

49 文明十一年四月二十六日崇徳院法楽百首

底本 高松宮蔵本

霞

413 松やまのはるのみとりをたちこめて かすみも千世の色は見えけり

覚恵

秋夕

覚恵

414 むかしおもふ秋のあらしのはけしさに 里の名きくもうちの夕くれ

神楽

覚恵

415 うちしめる庭火の影にしるきかな とるさかにはも霜(む)やをくらん(む)

寄原恋

覚恵

416 小さく原かりに逢よのつゆのそて むかしの玉のゆかもまさらし

述懐

覚恵

417 いまはわれおもへはわかのうら人に たちよしるへき老の波(なみ)やは

50 文明十一年六月九日御霊社法楽和歌

〔底本〕宮内庁書陵部蔵『類聚和歌』

名所夏月

覚恵

418 月しろきいなの小篠霜とみて 秋をかりねにあかすみしかよ

疎屋夕顔

覚恵

419 夕かほの花咲かこふあはらやよ 今(む)こん冬もかゝらましかは

樹陰納涼

覚恵

420 茂りあふ桐の木かけのあさすゝみ 一はもまたぬ秋風そふく

山人稀

覚恵

421 わくらはにことゝふ人のおとろきは 風やはかるゝ杉の下道

寄神祇祝

覚恵

422 そのかみのあらふるこゝろやはらけて 光をやとす千世の玉かき

51 文明十二年（一四八〇）八月十四日文明年中応製詩歌

〔底本〕統群書類従所収本

唐堯

覚恵

423 茅かやふく水にみしかきつち橋も すなほなる世を立渡れとや

羅浮山

覚恵

424 梅か香をかりねの山に夢さめて 梢にさはく村鳥（む）の声

52 文明十二年九月十九日細川道賢十三回忌品経歌

〔底本〕宮内庁書陵部蔵『品経和歌』

詠勸発品和歌

沙弥覚恵

425 白妙の象山のはを出にける 月の御かほも法のためとか

くく(述懐)

426 苔のしたにうつもれぬ名や朽すして うへし小松の千代まもるらん(巻)

53 文明十三年(一四八一)正月十八日禁裏月次歌会

【底本】宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』第七冊

岸柳

覚恵

427 はる風やたつたの川を渡らん(巻) 御むろの岸になひく柳は

早苗多

覚恵

128 今日いくか田子の手まなく取早笛 ゆひもやとはゝおひさらましを

朝時雨

覚恵

429 これやこのなに山姫の神無月 朝の雲の色にしくるゝ

54 文明十三年二月十八日禁裏月次歌会

【底本】宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』第七冊

若菜

覚恵

430 へたてなき春の光は数ならぬ 垣ねの中もわかなつむまで

祝言

覚恵

431 宮人のかさしに手折さくら花 匂はん(む)はるそかすりしられぬ

55 文明十三年二月十八日禁裏月次歌会

〔底本〕宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』第七冊

翫花

覚恵

432 春といふもしをたまふとなのりして 雲ゐの花にかくることは

56 年時未詳・禁裏五十首御うた

〔底本〕尊経閣文庫蔵『続撰吟抄』第三冊

禁裏五十首御うたの中に

岸柳

兼良

433 (を)をそくとき色こそみゆれ春秋の くるかたかはる岸の青柳

寄松祝

434 今日ひかん(せ)御前(せ)の山の小松はら 千世のねの日も君かためとて

47 年時未詳・『又片方』所収歌

〔国本〕北海学園大学附属図書館北駕文庫蔵『武家百人一首』八文・536  
所収「続六歌仙」本

435 白雪のみのしろ衣春はきぬ かさして行ん梅(む)の花かさ  
後成恩寺入道前関白

58 年時未詳・『叢塵集』所収歌

〔国本〕曼殊院蔵『叢塵集』

秋夕

436 よしやそのいづくもおなし秋ならは たへ(え)てな(む)かめんやとのたくれ  
兼良

59 年時未詳・『八景和歌』所収歌

〔国本〕福井県立図書館松平文庫蔵『集書』八M911・25

## 山市晴嵐

桃花野人 一条兼良

437 山本の霞消ゆく朝あらしに たつ市人のそてかへる見ゆ

## 60 懐紙

A 〔出典〕『高松宮御蔵御手鑑』（日本古典文学会 昭55・6）

## 詠方便品倭調

従一位兼良

438 一卷を三にわけつゝときしかと 色香はおなし花の下ひも

## 懐旧

439 しまかくれかくれし浪のあとゝめて さらに遠を追風そふく

B 〔出典〕永島福太郎『一条兼良八人物叢書31V』（吉川弘文館 昭34・8）117頁

## 住吉社勧請

文明七年二月日

## 一条殿さま御懐紙

## 詠社頭祝和歌

沙弥 覚恵(花押)

440 からさきの松にあひを<sup>(お)</sup>ひをちきらなむ むかしをしれるすみ吉の神

61 短冊

A

〔出典〕日本古典全集・正宗教夫『伊勢物語枕草紙』(日本古典全集刊行会  
昭12・1)

初恋

花

441 よそに見るとを山<sup>(は)</sup>とりのはつ尾花 ほにあらはれて恋もするかな

B

〔出典〕『大日本史料第八篇之十三』(昭2・11) 文明十三年四月二日条

冬江

兼良

442 三嶋江や氷にとつるあしのねの いまいく夜とか春をまつらん<sup>(む)</sup>

C

〔出典〕東山御文庫蔵元宝器御物『短冊手鑑』上

田家

兼良

443 あきはつるしつか山田のかりやかた かりにもとはぬくれそさひしき

D 出典 伏見宮旧蔵『短冊手鑑』上

青獸

兼良

444 かすかのゝ萩のわか葉をはむしかの つのおいかはるころも来にけり

E 出典 小松茂美『日本書蹟大鑑』第八卷（講談社 昭55・1）

述懷

兼良

445 雲とりのあやしやかゝる身なからに かふるところものおりにのひぬる

F 出典 『日本の美術 室町時代の書』第182号 昭56・7

待雪

兼良

446 日数のみつもりの浦の空さえて まつにはふらぬゆきそつれなき

G

〔出典〕大阪市立大学附属図書館森文庫蔵無刊記本『古短冊名鏡』Λ728・  
1・URAV

一条関白 後花園院御題

春月

兼良

447 かすむよの月にも物をおもふかな わか身ひとつの春になしつゝ

## 存疑

I 高野辰之氏旧蔵伝兼良筆詠草切

〔出典〕福井久蔵『一条兼良』（厚生閣Ⅱ昭18・4）65頁

初冬

i 夏にのみかふる衣と思ひしに 冬の立つ日も白かさねせり

歳暮

ii くれてゆく玉の緒かけて玉琴の またねもたらず春のしらへは

## II 『応仁別記』

〔底本〕内閣文庫蔵本ハ167・1200V

爰ニアハレニ浅増キ事侍ケル十月七日一条大閤御息依孫政房卿イ為御本所兵庫ニヲ  
 ハシマシケルカ常ノ御装束ノ体ニテ直衣狩衣優美タル御姿ナレハイカナ  
 ルアラ夷ナリ共カ、ルヤコトナキ御有様ヲ見シタリタテマツルヘキニ思  
 モワカス以長鑢御心モトヲ突通奉リケレ共少御身ヲハタラカシタニモセ  
 サセ給ハス南無西方極樂世界阿弥陀仏ト唱給テ其マ、朝ノ露ト消サセ給  
 ケリ関白ナトノカ、ルタメシスクナキ事也後日ニ奈良ニテ太閤聞召レテ  
 御歎中々文章ヲナストモ鳳凰毛モ難及鸚鵡舌モ宣カタカルヘシアマリノ  
 御事ニカクアソハサレケル

△注▽「イカテ」傍注。

△注▽  
 Ⅲ トテモシヌル命ヲイカテ武士ノ家ニムマレヌ事ソクヤシキ

## 参考

### I 伝兼良筆歌集切

【出典】大東急記念文庫蔵『手鑑』

- iv 掟をはを<sup>(む)</sup>そるゝことの賢さは 疵を求めこゝろなりけり  
v たれかまたむかしを思ふ心とて さもやよむへし<sup>(む)</sup>かなきもなし  
vi かけすてしゆくかたもなき山の井の そてにすゝしき吹風もなし  
vii えならぬは道をたつねて求給ふ 心しるきはたれかしりて<sup>(む)</sup>ん